

〈記念論文〉

# 幼稚園教育要領の改訂を保育に具現化する —週案の変遷を通して考える—

吉 田 とき枝

## 1 はじめに

平成に入ってから幼稚園教育要領はほぼ10年ごとに改訂されてきた。幼稚園教育要領は幼稚園教育の基本を示すものであり、その時代の子どもを取り巻く社会的変化や課題を反映していることから改訂は幼稚園の保育現場に大きな影響を与えた。筆者が初めて体験した改訂は、1964（昭和39）年以來25年ぶりの改訂となる1989（平成元）年の改訂である。これは筆者にとっても、ほとんどの幼稚園教育関係者にとっても初めて経験する幼稚園教育要領の改訂であった。現在筆者の手元に残っている担任時代の週案や日案を見直してみると、幼稚園教育要領の改訂に向き合い試行錯誤してきた保育現場の苦勞が伝わってくる。本稿では手元に残る週案を見直して、幼稚園教育要領の改訂が幼稚園の保育現場にどのような変化をもたらしていったかを振り返りたい。

## 2 研究の目的

これまで幼稚園教育要領の改訂とともに幼稚園教育も変容してきた。筆者の担任時代に作成した週案や勤務園での研究資料をもとに幼稚園の保育

現場ではどのような変化があったのか明らかにするとともに、保育実践の中で改訂内容がどう浸透していったかを考察する。

### 3 研究の方法

下の(1)(2)についてそれぞれ考察し、その結果を総合して改訂の内容や意図が保育現場の変化にどうつながっていったのかをまとめる。

- (1) 筆者が作成した当時の週案の様式や保育に対する園長からの指導について分析する。
- (2) 1989(平成元)年前後の勤務園の研究記録から改訂に向けての動きを分析する。

### 4 幼稚園教育要領について

学校教育法施行規則第38条には、「幼稚園の教育課程その他の保育内容の基準として文部科学大臣が別に公示する幼稚園教育要領によるものとする」とあるように、国が決める幼稚園教育の基準である。

幼稚園教育要領は1948(昭和23)年に「保育要領」の名前で文部省から刊行されたものに始まり、1956(昭和31)年に「幼稚園教育要領」として告示されて以来、時代の変化や教育課題を踏まえ5回の改訂を重ねて今に至っている。図1(p.41)は、2017(平成29)年に文部科学省が幼稚園教育要領(以下「要領」という)の改訂内容について説明を行う中央協議会で示された幼稚園教育要領等の主な改訂点をまとめて図示したものである。中央協議会で説明を受けた幼稚園担当指導主事や園長が同じ資料を用いて所属地域の教員にさらに説明を行った。

筆者は、1980(昭和55)年に名古屋市立幼稚園教諭になったため、1989(平成元)年、1998(平成10)年、2008(平成20)年、2017(平

## 幼稚園教育要領の改訂を保育に具現化する

成 29) 年の改訂を経験してきた。1989 (平成元) 年の改訂は学級担任として経験した。1998 (平成 10) 年の改訂時は主任であった。2008 (平成 20) 年の改訂は県教育委員会の主査として直接文科省の説明を聞く立場にあった。2017 (平成 29) 年の改訂は園長として最後の年であった。

### 5 週案の様式と保育に対する指導

#### 5-1 1964 (昭和 39) 年改訂幼稚園教育要領における週案

筆者が幼稚園教諭の職についた 1980 (昭和 55) 年から 1988 (昭和 63) 年に使用していた名古屋市教育委員会の週案の様式について考察する。

1964 (昭和 39) 年改訂の要領には、「第 1 章総則 2 教育課程の編成 (1)」に「教育課程の編成にあたっては、幼稚園における望ましい幼児の経験や活動を選択し配列して、適切な指導ができるように配慮しなければならない。」と記している。当時は、「望ましいねらい」を設定したうえで、「望ましい幼児の経験や活動を選択し配列する」ことが指導計画の中心であった。

1988 (昭和 63) 年の B5 判の用紙を 2 枚見開きに使用した週案 (図 2・p.42) では、左ページには「週のねらい」の下に毎日の「経験・活動」「ねらい」「備考」の記入欄がある。これは、「2 教育課程の編成 (1)」に示された「望ましい経験や活動を選択し配列する」ことを週案に具現化したものである。右のページには、「生活習慣」「表現活動・継続的な遊び・その他」について「指導事項・留意点」を記入するようになっている。生活習慣については、その時々継続的な指導が必要であるという考えが根底にあったと考える。

また、表 1 にあるように、当時は登園してから 10:30 ごろまで約 1 時半ほどの「好きな遊びの時間」があった。この時間は保育室にままごとや製作、積み木遊びなどのコーナーを設定して幼児が自ら遊具にかかわって

遊ぶことが中心で、日常的に遊びが翌日に継続していた。そこで、週案において左ページの「経験・活動」「ねらい」「備考」の欄だけでは指導計画が書ききれず、右ページの「表現活動・継続的な遊び・その他」の欄に継続する遊びを戸外遊びと室内遊びに分けて書きこんでいる。この欄にはこの週に予想される遊びや製作活動

表1 1日の主な生活の流れ  
(1988年ごろの名古屋市立幼稚園)

〈時刻〉	〈活動〉
8:45	登園する 好きな遊びをする
10:30	片付ける 製作活動やゲームなど学級全体の活動をする。
12:00	弁当を食べる 好きな遊びをする
13:30	降園する

について材料や作り方とともに記入している。このことは、1989(平成元)年の改訂のポイントとなる「環境による教育」「遊びを通しての総合的な指導」につながる取り組みである。また、毎日違うねらいをもって保育するのではなく、1週間の生活の流れの中で活動をとらえ、継続的なねらいを考えていたことがわかる。

## 5-2 1989(平成元)年改訂幼稚園教育要領における週案

水原(2016)は「1989年の改訂は本質的には系統主義から『環境による教育』への大転換である。改善の視点として協力者会議は(1)幼児の主体的な生活を中心に展開、(2)環境による教育、(3)一人一人の発達の特性及び個人差、(4)遊びを通しての総合的な指導という新方針を打ち出した。」と述べている。この4つの方針のもと、具体的な教育目標を示す「ねらい」とともに、ねらいを達成するために教師が指導する「内容」を区別して考えることや、領域が「健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画表現」の6つから「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5つになるなど大きな変化があった。小学校で「生活科」が新設されたのもこの改訂のときであった。

## 幼稚園教育要領の改訂を保育に具現化する

保育の場で、「幼児の主体的な生活を中心にする」とは具体的にどういうことか、筆者自身改訂直後の保育ではどこまで教師が主導してよいのか戸惑いがあった。「幼児が主体的に生活する」ために、あらかじめままごととコーナー等設定しておくで教師の意図する遊びに誘導するように感じられ、登園時に遊具をきれいに片付け、遊びたい幼児が自分で遊具を取り出せるようにした状態にしておいたところ、「遊びたくなるような遊具の配置や設定をしておくことで、幼児自ら環境を選んで関われるようにすることが大切である」と園長から指導を受けたことが印象深い。また、ねらいは、育てたい心情・意欲・態度となり、それまで日案で使っていた「指導」という言葉の多くが「援助」という言葉に置き換わって教員に浸透していった。

前述の改善の4つの視点をもとに週案の様式も試行錯誤が続いた。保育に生きる週案になるように園をあげて検討したり、筆者独自でより使いやすいものを工夫したりした。図3(p.43)の1990年の週案では、最初に「幼児の実態」の欄があり、それを受けて「週のねらい」を記入するようになっている。1988年には一日ごとに「経験・活動」「ねらい」を記入していたところを1週間通しての「予想される幼児の活動等」を書き込むことができるようにして、幼児の園生活の連続性や主体性を意識させる構成に変更された。環境構成については右ページに書き込むようになったものの、1989年と同じ様式のままで、週案用紙の中に計画的な環境について記載するスペースは明確に設けられていない。「音楽リズム」「視聴覚教材」「園外保育」「飼育栽培」の欄があるが、改訂前の領域「音楽リズム」「自然」を意識したものというよりは、遊びとは別に、日常的に学級で歌を歌ったり絵本や紙芝居を見たり小動物の飼育や栽培をしたりする活動についても計画的に考える必要を感じてのことであった。

この当時に担任をしていた15年間は、週案とともに短期の指導計画である「日案」を書いていた。1989(平成元)年の改訂では、「子どもから

の出発」(森上・大場・高杉、1989)という考え方の基本があったため、毎日の子どもの姿を丁寧に記録することで、より深い幼児理解が求められていた。研究保育や事例検討会では、幼児の姿の記録から、幼児が育ちつつあることを読み取ることや、環境からの影響、どのように援助していったらよいか、などについて同じ園の教職員で話し合うことが多かった。

図4(p.44)は、名古屋市教育委員会から提供された様式を工夫して使っているものである。この様式はB4版2枚で作成されており、1枚目は「期のねらい」「先週の姿からの願い」、週の「ねらい」「内容」、そして「環境の構成・予想される活動・教師の援助等」を記入する欄が一目でみられるようにできている。右端には、図3(p.43)と同様に筆者の手書きで「生活習慣」や「音楽リズム」「視聴覚教材」「自然」について記入するスペースを作っている。それまでの保育実践の中で、生活習慣についての指導や歌、絵本などの教材についての指導を確実にしていくための工夫であった。

2枚目は、左上に「評価・反省(健康・教師や友達とのかかわり・自然とのかかわり・表現・言語等)」という見出しがあり、B4サイズの用紙を自由に使うことができるようになっていた。1週間分の毎日の記録を書いたうえでその週全体の記録や評価・反省を記入することもできた。そのため、週案を日案としても使えるように個人の指導のポイントなども書き込んで週日案として使用していた。

### 5-3 1998(平成10)年の改訂幼稚園教育要領における週案

この改訂では幼稚園教育の基本的な考え方は前回の改訂を踏襲しており、1989年の改訂の時ほど大きな変化はなかった。名古屋市教育委員会で作成する週案の様式で図4(p.44)と違うのは、「評価・反省」の項目が入ったことである。図5(p.45)の週案については、記入の項目はともかく、用紙がB4サイズで大きくて扱いづらかった覚えがある。その後2000(平成12)年か2001(平成13)年には図6のようにA4用紙を2枚、見開

## 幼稚園教育要領の改訂を保育に具現化する

きで使う形になった。

この様式では、左のページに、何週目であるかをまず書き込み、「期のねらい」「先週の幼児の姿からの願い」「ねらい」「内容」「予定」「評価・反省」の欄がある。(図6(p.46)では大学で使用したため「子ども」になっている)右ページは一面に「環境の構成・予想される姿・教師の援助等」が記入できるようになっている。右の紙面を広く使えるようになったことで、環境図を入れてわかりやすく記載することもできるようになった。

### 5-4 2008(平成20)年改訂幼稚園教育要領

この改訂の時、筆者は県教育委員会に在籍して文部科学省の幼稚園教育担当者から直接に改訂の説明を聞く立場にあった。特に印象的であったのは、各県において園長や教員に説明をするときに使用する読み上げ原稿のついたプレゼンテーション資料が配布されたことである。説明する担当者にかかわらず、全国同じようにしっかりと改訂点について伝えてほしいという意図からと聞いている。この時の改訂の要点はいくつかあったが、「教師の意図性」と「幼児の主体性」とのバランスが取れた保育を、というところが強く心に残っている。1989(平成元)年改訂時から基本としている「幼児の主体的な生活」と「環境による教育」「遊びを通した総合的な指導」について各園に浸透する中でそれぞれの解釈の違いが出てきて確認する必要が出てきたと考えると興味深い。

### 5-5 まとめ

ここまで、要領の改訂と週案の関係について考察してきた。要領改訂のたびに週案に書き込む内容が変わり、様式が変わってくる。要領が目指す幼児教育の姿を指導計画である週案に落とし込むことで、教員の考え方も変わってくる。要領改訂の意図は週案の作成を通し少しずつ教員の考え方に染み込んでいくと言える。1989(平成元)年の改訂で大きく変わった

週案の様式は、その後少しずつ微調整しながら確定するまで10年以上かかり今に至っている。名古屋市教育委員会から配られた様式は紙からデータでの配信となり、現在では教員各自がPCで作成している。週案の立案の時は教員同士の話し合いが欠かせないが、週案への記入については各自のPCでの作業になるため、それぞれの使いやすい様式へと変化していくことが予想される。週案作成の方法が変わろうとも、幼稚園教育の基本となる幼稚園教育要領の理念を具体的にして反映させた週案であることが求められる。

## 6 勤務園での研究記録から

1989（平成元）年の改訂をめぐって保育現場の変化はどのようなものであったか筆者の勤務した園の研究テーマを通して振り返る。

筆者が1985年から勤務した名古屋市立高田幼稚園では、1985（昭和60）年に名古屋市教育委員会から研究委託園として指定を受け、研究報告書をまとめた。以後毎年テーマを決めて紙面発表を続けていた（表2）。

1985年のテーマには「主体的」「遊び」という1989年の改訂につながる文言がはいっている。以後1986年、1987年と「遊び」をテーマとした主題に取り組み、これらの研究では遊びの中で幼児が育っていくとの考えがベースとなっている。筆者は1987年に育児休業中だったため断片的な記憶しかないが、幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議の報告書「幼稚園教育の在り方について」が出されたのが1986（昭和61）年9月であることから、要領改訂の方向性については少しずつ幼稚園の教育現場にも知らされていたのだと考えられる。1964（昭和39）年の要領改訂から20年以上経ち、現状にそぐわない部分や新たな課題など教育現場でも感じることもあり、この研究テーマになったのだと思われる。

幼稚園教育要領の改訂を保育に具現化する

表 2 1989 年前後の名古屋市立高田幼稚園研究テーマ

1985 (昭和 60) 年	自発的な活動を通して主体的に遊びに取り組むことができる子供を育てる指導 —よく遊ぶことの出来る子供を目指して—
1986 (昭和 61) 年	よく遊ぶことができる子どもを目指して —教育課程作成のための一試案—
1987 (昭和 62) 年	ちえと力を出し合って—いきいき遊べる子をめざして—
1988 (昭和 63) 年	不明
1989 (平成元) 年	主体的に生活することのできる幼児の育成 —環境に視点をあてて—
1990 (平成 2) 年	充実した園生活をする事の出来る幼児の育成 —環境に視点をあてて—

1989 年の研究テーマは要領改訂の主旨がそのままテーマになっている。1990 年のテーマである「充実した園生活」の言葉の意味についてどうい生活のことを言うのか、職員で何度も何度も話し合い「楽しいばかりではなく、葛藤体験も含めてその時々その幼児の発達にあった生活」とであると確認するに至った。

要領の改訂は 1989 年であったが、すでにその前から改訂内容の一端が園の研究のテーマとなっていたことから、改訂の内容について教員に問題提起されていたことがわかる。現在のように情報が早く伝わらない時代であったが、何年かかけて改訂内容は少しずつ教育現場に浸透していったと考えられる。

## 6 まとめ

要領の改訂は『幼稚園教育の在り方について』などの報告書を通して幼稚園教育に課題や改善の方向が広く伝わる。それを受け、改訂前から各園での保育実践における課題意識を醸成し、週案の作成、保育実践、保育研究などを通して改訂の意図することが具体的に伝わっていくことが分かっ

た。日本の幼児教育の本質を伝える幼稚園教育要領がこれからも教育現場の取り組みを通して着実に根付いていくことを期待したい。

参考文献・資料

文部科学省（2017）幼稚園教育要領の改訂について 改訂幼稚園教育要領 中央説明会資料

水原克敏（2016）1989年以降の幼稚園教育課程の規準とモデル・カリキュラム早稲田大学 教育・総合学学術員 学術研究（人文科学・社会科学編）第64号  
森上史郎 大場牧夫 高杉自子（1989）幼稚園教育要領解説〈平成元年告知〉フレーベル館

文部省（1964）幼稚園教育要領〈昭和39年告示〉

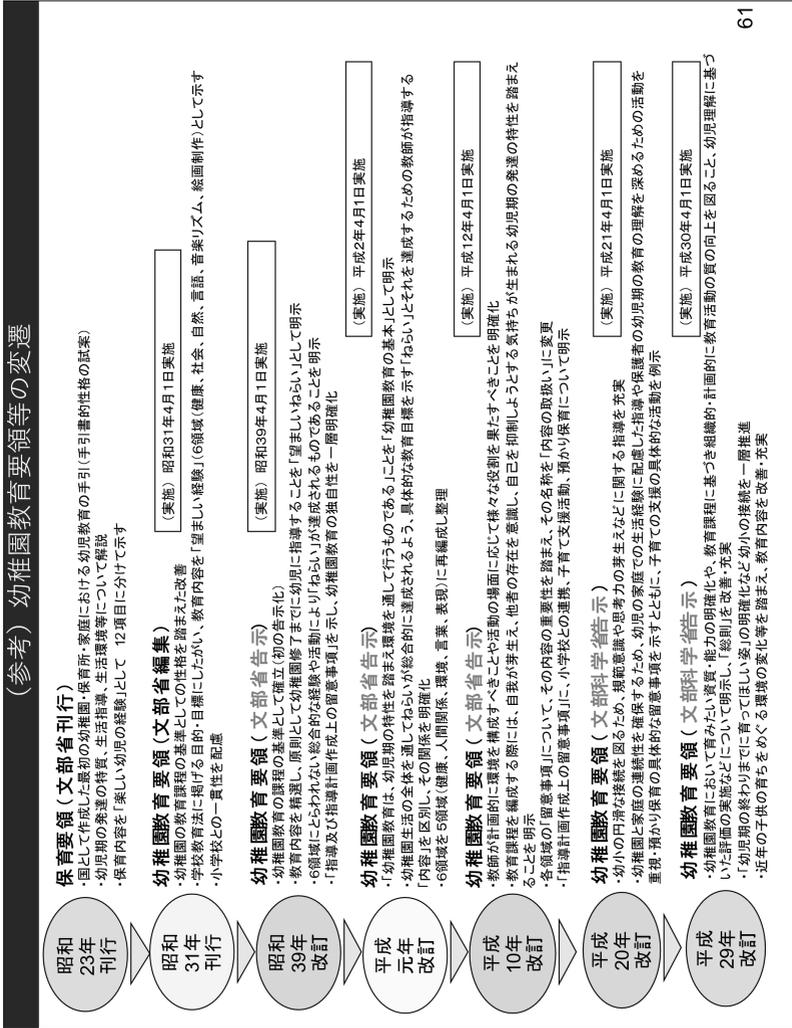
文部省（1989）幼稚園教育要領〈平成元年告示〉

文部省（1998）幼稚園教育要領〈平成10年告示〉

文部科学省（2008）幼稚園教育要領〈平成20年告示〉

文部科学省（2017）幼稚園教育要領〈平成29年告示〉

図1 幼稚園教育要領の変遷 幼稚園教育要領の改訂について—主な改訂内容—  
(文部科学省、2017)









幼稚園教育要領の改訂を保育に具現化する

図5 1999(平成11)年使用 名古屋市立幼稚園週案様式 B4用紙

週(月 日) ~ 月 日) 期のねらい			
先週の幼児の姿からの願い		ねらい	内容
環境の構成・予想される活動・教師の援助等			
			
備考	日(月)	日(火)	日(水)
	日(木)	日(金)	日(土)
評価・反省			

